第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

一般の部

佳作

母の手作り弁当

山崎　幸正

「また、このおかずか」

学校の昼休み、弁当箱を開けた私は心の中で呟いた。

今から半世紀ほど前、高校生だった私の昼食は、母の手作り弁当だった。でも料理が苦手のうえ、共稼ぎで時間に余裕がないせいか、粗雑な調理のおかずが多かった。けど母が忙しいのは分かっていたので、文句を言うことは控えていた。

ある日の朝、些細なことで口論になると、つい、「手抜き弁当」と言う言葉を吐いてしまった。母の曇った顔が忘れられない。

数日後の学校の昼休み、弁当を開けようとすると、「ラーメン屋に行っか？」と同じクラスの友人に声を掛けられた。「弁当があるけど、味気ないからなあ」と思うと、誘われるままに出掛けてしまった。

学校の帰り、「中身の詰まった弁当箱を持ち帰るわけにはいかない。どこかで食べよう」と思いながらバイクを走らせる。すると、山の中腹に小高い丘が見える。いつも見掛ける緑の丘。バイクは山道を上がって行く。

数分で辿り着くとバイクを停め、リュックを手に地面に腰を下ろした。丘から町を一望でき、それを取り囲むように、この地方に名を馳せる北信五岳の山々が、胸を張って鎮座している。壮大なる景色を眺めながら弁当箱を開けると、幾種類もの色鮮やかな品々が並んでいるではないか！

豚肉と玉ねぎとピーマンの炒め、キャベツとレタスとニンジンの刻みサラダ、それにキノコと山菜の混ぜご飯。

随分と、手間を掛けたんだな。豚肉の柔らかな歯応えと混ぜご飯の旨みが口の中を満たす。朝早く起きて台所に立つ母の姿を想うと、後悔の念が押し寄せてきた。この弁当を、いつものように、教室で食べたかった。

それでも連なる山々を眺めながら弁当の味を噛みしめると、やるせなく沈んだ気持ちが、緩やかに和ん

でいくのだった。